



# 蝦夷風俗彙纂 = Ezo fūzoku isan. [Series 2, vol. 7] 1882

[s.l.]: [s.n.], 1882

<https://digital.library.wisc.edu/>

<http://rightsstatements.org/vocab/NoC-US/1.0/>

The libraries provide public access to a wide range of material, including online exhibits, digitized collections, archival finding aids, our catalog, online articles, and a growing range of materials in many media.

When possible, we provide rights information in catalog records, finding aids, and other metadata that accompanies collections or items. However, it is always the user's obligation to evaluate copyright and rights issues in light of their own use.

蝦車風俗彙纂後編

七

CHESTER S. CHARD



蝦夷風俗彙纂後編卷七目次

○雜錄

蝦夷並北蝦夷習俗

記憶の事

旅裝の事

腕力の事

製墨の事

火を揉出せ事

土人へ賜物廢止の事

月代を忌む事

血を忌む事

器物を秘藏する事

犬を使役する事

子なき時神を祈る事

雜混寢の事

人足の事

擇捉人高田屋金兵衛を慕ふ事

蝦夷人赤人ふ親む事

浴せざる事

水豹等の臓數をある事

ベウタニケの事

蕗葉を衣の代ふ用ふる等の事

山神ふ酒を供する事

蝦夷地饅饉の事

蝦夷牧馬の事

染料の事

蝦夷うわれめ事

夷女高尾と名のる事

藩士夷女の手を取て辱めらるゝ事

勇を以て感服せしむる事

蝦夷人と使役する事

蝦夷人ふ平伏せしむる事

井を掘る事

蝦夷地へ穀種を渡さぶる事

疾病の事

蝦夷地へ鼠群集の事

文字及暦法なき事

廁の有無大小便の事

雪焼の事

飼犬窓より墮入事

蠻夷風俗小人穴居せ之事六  
卷

才キナ魚の事

力チコルベ魚の事

カムイシマ魚の事

○蠻夷並北蠻夷習俗

蠻夷人の風俗を見より。年重なき國あまハ租税定出  
均配もなし。金銀不通用おれハ金銀を諸所る貿通  
者起ある。野菜を食せきそば用酒を轉支開拓もなし。  
美服着用せざれば。色品摸様恰好等の望古がも。其  
毛澤山ある國は達成。朝夕吐食物をも患ふれ。毎日他

井水與水事

蝦夷地一般種稻渡河一水事

疫病の事

蝦夷地一朝鮮集の事

魚事

或也日本之魚の事

本丸七角の事

蝦夷風俗彙纂後編卷七目次終

蝦夷風俗彙纂後編卷七

○雜錄

○蝦夷並北蝦夷習俗

蝦夷人の風俗を見るよ。年貢なき國あ達バ。租稅を出  
ハ心配アアシ。金銀不通用なれば。金銀を儲貯る貪慾  
も起らば。野菜を食せざ達バ。田園を耕す骨折もなく。魚類  
美服着用せざれば。色品摸様恰好等の望もなく。魚類  
も澤山ある國な達バ。朝夕比食物をも患<sup>ム</sup>バ。毎日悠

々緩々として遊び戯。月日を送るなり。是蝦夷一般の風俗なり。蝦夷草紙

唐太島の夷人習俗ハ。元地ふ同じと雖も。亦少し異様之事を有るなり。人氣元地ふ比を達バ。稍々豪強凜然たる處有るよし。衣服元地の如くアツシを着まれども。ヨタラツペと稱せる草絣以て織り衣となし。服を見る者亦多し。ヨタラツペの地合。アツシふ比を達バ。緻みして頗る上品あり。又犬皮を着服せる者多し。履ハ水豹皮を以て作り。是をケリヒと稱す。煙草を納る器。山丹製此皮より作りたる也。腰ふ提る者多し。女夷も耳

環の外。山丹渡來の青玉等を數個連絡。數珠の如く。  
頸より胸前より垂下せる者多く。且所謂マキリといふ  
小刀二個を左又尻髣尻より垂下し。而して口吻より黓黓を  
れども手腕より其事なきよ似たり。

元地地女夷夷。既より嫁嫁するもの。必手腕より黓黓。又歸俗歸俗の者者も往々往々あり。聞くより近來役夷人役夷人。役名改  
まり。總乙名乙名を庄屋庄屋。脇乙名乙名を總名主總名主。總小使總小使を總年寄  
とし。上下着用着用此免許免許ありて。乙名乙名を名主名主。小使小使を年寄  
土産取土産取百姓代百姓代と改めたり。此等等を袴羽織袴羽織を着用の  
免許免許よりよし。亦魚皮魚皮を縫合縫合せて服服する者者を見る。

女夷ふ多し。魚をイトウ鮭魚の皮を多分ふ用ふ。外何  
魚の皮ふても用るよし。又此邊比風俗ふも。小兒額髮  
ふ飾りてある。赤小豆ふどようも一等小粒ある。練物  
比玉を連ねて。三角比形ふし。髮ふ結付るなり。同島ホ  
ロコタン男夷の容貞。オロツコふ比生達バ。稍險相ふ  
似くる。悍黠狡智比者と思ふ。性情交易を事とし。甚  
貪惡あり。麤暴ふして人ふ接るふ。揖讓の禮を知らば。  
其人品蝦夷ふ及むざる遠し。

蝦夷人ハ。徃々豪傑衆を御するの才あるも比高き  
ども。概するふ魯鈍懶惰者多け達バ。黠ふもあらば。

髮ハ頂上みて左右ふ分けて。後みて束ね。三つ組ふして垂き置くあと。オロツコと異ある事なし。耳環を付る事も亦同じ。衣服も皆滿州此品を用ふ。木綿獸皮魚皮柄。其製寛大ふして丈ハ腰の上ふ止る。脚絆ハ木綿をも用ひ。又ケリをもそく。此節も大抵洗足の者多し。腰盤ハマキリ刀をば佩ひざるなり。女夷の色白く平顔ふして頬古け。オロツコ比婦人より少し品有る。似たり。人を見て顔を上げば、俯して羞を含む意有る。蝦夷の女子も同じ。髮も頂上みて分け。後みて三つ組ふして下げる。或ハ結ひ置く事。オロツコも異なる事

なし。服も皆滿州比物にて。丈長く踵ふ及ぶ。裾ふ真鎗  
ふて。小ある紋を並べ付る事。又オロツコふおふじ。但  
帶也。家居及び近邊往來の時を用ひ。遠方へ行時の  
み用るよし。耳環。銀環。青玉或ハ瑪瑙を下げ。一耳  
み四つ或ハ三つ位。下げて飾とあり。兒女といへども  
皆同じ。但念珠の如きものと頸ふ掛くるハ見え。又小  
兒を縛し置て。チヤクカといふ物。オロツコと形を異  
ふ。其製ハいづ。椴木の一尺徑許なるを二つ。割  
り。丈一尺五六寸。小して。鑿抜きて竹筒を割る。如く  
みし。下ふ底を残し置。犬の皮を以て其筒ふ敷き。其中

よ小兒を入達。底。腰を掛け足ハぶらうと下る様  
して。足。バ皮。みてくる。縛し置。右チヤクカ。み綱。と  
附。釣り置く事なり。乳。をのまひ。も其儘抱きて飲ませ。  
但夜分ハ。もづして。抱き卧。サといふ。シリマヲ。カ住夷  
ハ。蝦夷人種。みて。風俗又絶て異ある事なし。何の年此  
地。み占居せしや。其詳りあると得ざれども。コタンケ  
シと本地。ナ中間。オロツコ人の雜廁。を。ナ。と。殆ん  
ど奇と稱。モベシ。當地ハ。クシユンコタシ。よう甚遼遠  
なるゆゑ。他の土人。ナ如く取て使役。する事なし。故。ふ  
介抱の米穀等。も與ふる。あとあし。只土人時として。ク

シユンコタン税館へ謁見ふ至り。獸皮杯を以て衣服  
を貿易する比み。故ふ其食ふ所の物も魚獸肉或毛草  
根木實なり。服も蝦夷同様アツシヨタラツペを用ふ。  
中國の綿類もあり。器物も往々山丹産を用ふ。衣服も  
少しあ用る様子なり。又矢鏃釵杯も其自製より出づ。そ  
の地金ハ釘比折<sup>シテ</sup>等を用ふ。此地一種比鞆<sup>ヒツ</sup>あり。其製  
木を以てし。風袋ハ魚獸皮を用ふ。其風を發出する口  
も木を合せて寛比如く<sup>シテ</sup>。長さ一尺五六寸。其風を含  
む所も琵琶の腹の如く。中央ふ孔を開き風を吸<sup>ス</sup>入<sup>ル</sup>也。  
側面を魚獸の皮革を以て袋を作り。是ふ黏着<sup>シテ</sup>琵琶

腹比如き者。其底ふ握り。之を用る時。その上下  
比握りと採りて。開合搖動。走まば。輒ち風を噴出。甚  
陋麤を極むといへども。愚俗ふも感すべき物なり。又  
水豹を刺し鈎。夷語ふトナと云。其製落葉松の直  
幹を擇び。其中心を以て五六丈許の長竿を作りて。其  
末ふ鈎を結着す。用法河岸或ハ海濱ふ。長さ一尺許あ  
る杭を。十餘本列植し。水中ふも又四五本植以て竿を  
擎け。夷人其竿根を持し。水豹が至ると覗ひ。之を刺す  
なり。諸又此地ふ頭目五人なり。又閥閱を以てなり。  
余等が宿せし家比主人を。ノキウナタラと云ふ。其五

人中第二位の者あり。是夜右北五人を呼來り合ひる  
が、オロツコ一人を召して。此邊の様子等彼是と質問  
したり。何分此土人ハ中國の民たる心得の様み見受  
たり。タライカオロツコの兩種ハ雜居たりと雖ども。  
互ふ嫁娶ハ通せばといふ。是夜來會せくる。オロツコ  
人の名をナカメノといふ。是又一箇の酋長なり。オロ  
ツコの風俗定まれる酋長なし。其豪強ある者を稱目  
して。アツサラカムイといふ。

アツサラハ。夷語事の呈露するもとといふ。カムイ  
也神みて。アツサラカムイとハ。名也顯それし神人

といふ義みて。其人を稱賛するなり。

之を以て其頭目となし。此ナカメノも其アツサラカ  
ムイなり。唯レボロオロツコの地キール。チンカン  
チーなる者なり。是ハ累世其酋長たる由。其主として。  
尊信する所の鬼神也。別みなき六と蝦夷ふ同じ。其至  
る所山川社神を祭る事。亦蝦夷ふ同じ。唯其屋中ふ數  
々せ木偶を置くを見たり。是又神社類といふ。其大一  
尺許みて。木を刻て人面を作る。眉目鼻らつて耳口あ  
し。頭頂よ木幣を植。體ハ水豹皮を以て襲ふ。觀國錄  
附オロツコ人風俗

オロツコ人も禮儀等も絶て辨知せざる様子なり。物を與へし事も數度なりしう。曾て禮謝の狀あし。一人ふ物を與きバ。後より數人隨ひ來り。與ふるを待つ容ちらりて。一ふ中國の乞兒非人也如し。され全く窮の志らしむる者う。オロツコ人も都て容貌卑陋なり。男夷も顏色柔和。額廣く鼻低く。眼孔細く尻下り。眉毛薄く形柳葉比如し。頬少しふくれ。口付も並。髭鬚あきもの多し。頭髮赤薄く額上みて左右二分け。後頂みて三つ打ふ組み垂き置くあり。耳環も銀環ふ瑪瑙の玉を付たるを穿つ事。男女同様あり。衣服ハ滿州製也。

比を着。酋長たるもの始も皮服を用ひしが。我等嚮導するふ付。宅ふ行しひとき。滿州製比紺羅紗比古手を着して出たり。其製僧衣の如く。巾廣みて裳の方廣がりたるもの襟を合羽比如く右へ深く合せ。真鎰の牡丹掛けニタ所ふ附てあめたり。袖を筒袖みて指先まで掛け様ふしたり。右前ふ合せてあり。魚皮獸皮服を皆是より効ひて製作したるものなり。襪ハ水豹比皮のケリを用ふ。襪ハ巾六七寸長尺許なる木綿比端ふ。コヤ貝比小なるものを並べ付け。一段二段或ハ三段を付たるあり。夫と前ふ下げて覆ふまであり。女夷も容

貌男小替らば。但頬ふく連色白き不どの違ひ也。勿論柔和なる事を一倍なり。都て男女共平顔みて下品あり。髪を額廻みて左右へ分け。後兩耳は上みて三つ打ふ組み左右へ垂き。或も結びたるもあり。襪襷都て男夷ふ同じ。服も同様なれども。裾ふ清の乾隆嘉慶道光杯の真鍍錢を。並べ着て飾となしたり。帶も山丹比物みて。皮みて上ふ真鍍比紋散し様の飾をなし。其下ふ渦巻け如く。真鍍みて拵へたるものと並べ下げて飾とい。扱又女子年は頃十四五あるべし。酋長は子供ふや。天鵝絨比筒袖の服を着し。ケリをもき。耳環を付

け。襟よ青珠黄玉瑪瑙水晶あどを念珠の如くよ持。二  
筋を掛けたるを見る。又三四歳はものも。女兒も必念珠  
せ如き者を。襟よ掛けたり。男夷の言語アイノよ似れ  
ども。早言ふして舌は足らざると云按排たりて。更よ  
通せし。觀國錄

東海岸タライカより奥地よ。オロツコと稱する異俗  
の夷なり。其人物大よ蝦夷鳴ふ異よして。其言語も又  
ひとつからば。理髮總て剃切のよとなく。男夷を一組  
ふして背ふ垂ま。或そ束て頸ふ垂る。其情態俗習。唯ふ  
一時の應接なまば。詳あるよとぬといへども。其顔

色容貌下品にして。異夷無慙を表せり。女夷亦髪を亂垂せば。大抵兩耳の後ふ束ね。或も分組て背ふ垂。又も男夷のぶとく。頸上ふ束ねたる者ありて。其狀一ならば。其容貌顏色蝦夷島ふ比しては。美艶ふして。且人ふ媚るけ妖態多し。浴湯施粉のことハなしといへども。日々其面を水濯し。其頸を梳う。粧飾をなほもの多し。耳飾の環亦南方と異ふして。男夷も小環をつけ。女夷も大環ふして。數環の玉を飾とい。北蝦夷圖說

## ○記臆の事

夷地ともとより文字知らぬば。たゞ古老の口碑を傳

ふるをもて證となはざれども會所もて稼料の算勘  
のびときを。聊も違ふことなし。算盤もて坐るよりか  
却て慥なる。又寶もて漁塲を買取らるる。急度いひ  
傳へて。後の世までも忘失するあとあく。祖父或は曾  
祖父の時。何々の鍔。あるひも佩刀もて買おりなど。  
シヤモ等の立入り。いひくろめんとなはゆ。中々ふ  
動うむ。常ふ忘るあじと思ふときも。柳檣櫛の幹ふ傷  
つけ。まゝ繩をむきびて標とせぬ。あれ永吉州の俗。  
里程をもかるふ。柳を挿み繩をむきびて内外を定む  
る。あれ柳條邊といひたるふ。おのづから鬚鬚せり。蝦

夷夜 北海隨筆同

後卷

○旅装の事

蝦夷土人皆草履草鞋を用ひ。蓑笠を着せば、旅路ふ  
赴けども厚子の單物と着用せる也。帶も有合せた  
るもの。或も繩みて。藤蔓の類みてても用ふなう。旅行  
の道具ふる。カロフと云て。火道具の提物と。弓箭と  
きせる煙草入等のも比のみなり。蝦夷草紙  
旅行の節。キナ一枚則敷物なり。薰鹿鮭等所持し。夜ふ  
なれば。山谷曠原の別なく。右比キナを敷き。衣服を覆  
ひ。傍ふ火を燃して卧坐と通常と。但弓矢を携へ歩

行。蝦夷雜書

○腕力の事

蝦夷人。腕と頭より力ありて。重き荷を額へらてもの  
をなし負へり。されども腰より力なきゆゑに。日本人と  
角力戦なむ。勝者のあし。又云。東部の者尤勇悍なり  
といふ。北海隨筆

○製墨の事

北蝦夷の内。シリマヲカといふ處みて。行硯の墨薄く  
ぬうしらば。水を注ぎ。木の切もて攪拌居らしよ。老人  
一枚の鍋持來りて。是戻伏せ。その下みて樺皮を

燒きて。其油煙を鳥羽羽みて拂ひ。行硯ふ入れ。矣。う  
々るべ。少し。亦墨ふ異なる事なし。老夷いふ。我等矢を染  
る時も。皆此墨ふ染るにて。赤と墨とふ染し。矢哉見せ  
しげ。其赤きと問しうば。シユヘーと答ぬ。依之余それ  
をあふふ。赤き岩石を一片呉れ。さう。實ふ不自由なれ  
ば。又それなりふ。事濟りと感し。侍りぬ。北蝦夷餘誌

○火を揉出を事

久摺字チヌケフの土人。エコレといふもの。揉木古て  
火を出しぬ。甚不自由あれ共。古風を愛むべきものな  
り。能乾する根の木へ。獮猴桃ノログンカラの木。赤ざきの木也。久

しく水より浸り晒さるを以て揉時より上下熟して火出  
るなり。其木口を吸ひ燃出せ。それを搾皮より附るなり。  
まことに山中等にて煙草火より持行ふも。此木より附さる儘  
持行。本邦火繩の代として用ひ足あと奇なり。

伊勢神宮より石火屋殿にても。檜の木を枇杷の木より  
用ひて揉ば火を出せ。本邦所々の大社にても。此揉木を  
も用ひ所らなるなり。久摺日誌

○土人へ賜物廢止の事

寛政三年。同四年御用の節も。前々より仕來うの  
通ひして。新法を出さば。只升秤を正しくして。交易の

品宜しき物を撰み。老人子供へハ飯をふるまひ。貧賤の者へも。御手當する事を。専要ふしたる故ふ。誠ふ蝦夷人悦び歌を謡ひ踊りを舞ひ。難有事を覺えたり。夫ふても。御金藏へ千兩餘。御益金をす納めたり。今度御用地となりて。飯一椀の振まいをなく。土産と名づけ。蝦夷人へ物を與へざる事となり。然うといつども。徳内も。是迄遣し來り。今更與へざる時も。先年より老少の蝦夷を憐みたる所も。却て懐けのためぞくりのやうふも當り。歸伏せためふもならざれば。自分の物ふて與へたき旨。三橋藤右衛門へそりうた疋ども。決し

てならぬ事となり。前年より約束したるものも遣さ  
ば。其言と其實と找違ひた達ば。蝦夷人も悦をば。數度  
行たるふとなきば。知きる蝦夷も多く約束を違ひた  
るを氣の毒あり。執事は人々の了簡ふる物と與へ當  
坐を悦しめたればとて。永續も覺束なし。當時の恨ふ  
も拘らば。直ある法を立て押せしといふ。至極尤も  
道理ふ聞ゆるなきども。大なる誤あり。當時の難義ふ  
拘らば。直ある法を立るも。日本地百姓の事なり。蝦夷  
も未だ異國同様比民也。當時の難義ふ構そざれば。書  
經ふ謂ゆる脅從固治比如し。國法は嚴しきふ迫脇せ

らきて從むる民も國の寶ともありがまし。殊ふ蝦夷地異國の界なきば。腹心せ民ふしてもほしき事なり。是即城郭も均しき堅固の地と謂べし。用立たるものへ恩賞として物を遣すふ所り。政事ふ害となまべきり。最上常矩厚岸亂申上

○月代を忌む事

松前大野村の喜三郎といふ通詞。蝦夷せ風儀と能く辯へて。蝦夷ふ惶らめたるものなり。蝦夷ども常ふ云けるを。喜三郎を恐るべき人あり。盜を志する者何らか。髪を剃らんと憤り。又非分なる事られば。チヤウラ

ケといふ切口上みて。使と出んとて皆伏したり。蝦夷人髪剃る事を恐れ。改る言語ふも伏せる事如<sup>レ</sup>此なり。然る處蝦夷御用地となりて。髪を剃べしと申付るふ。蝦夷ども恐遠ざるものあし。若ち叶ぬ時も。松前領北<sup>ニ</sup>逃去るべしといふものあり。山奥へ引籠り住居せんといふも北もあり。蝦夷ども心落つのぬ様子なり。幌泉會所みて。若き蝦夷を月代を剃り。日本の風俗ふ進めて。米酒等を與へぐるふ。其親類北もの云けるを。病死せるを是天命なまば。哀むといへども。除くべきやうもなし。今月代を剃り。先祖より受たる姿

残失ひ衆人ふ交り結ぶ事も能そば。天比罪を遁るす所なし。此上ハ蝦夷ども交をも許さば。其身も自ら逼りて。惡逆のあとも崩ほべしとて甚ざ歎きたり。按するよ。禮記王制の篇よ。器械制を異ふ也。衣服其宜を異ふも。其教を修めて其俗を易へば。其政刻ふして。其宜残易へば。是實よ寒國を治むるよ。思ひ當りたる事ある。同上

○蝦夷人血を忌む事  
夷人も殊の外血を見る事を嫌ふ。已よ松平信濃守手附。御普請役格御雇北中の島隼人。東夷地沙流紋別の

邊より、子細ありて亂心し切腹したる時。其場所より居合せたる夷人。男女とも六七十人。不殘奥山へ逃去。入足ふ差支たり。依て番人ども。夷人へ利解申令。追々歸郷せしむる爲。二日滯留せり。都て夷人何事よりらば。心よかなもざる事。直ふ山中へ逃去べしといへり。蝦夷道知邊

○器物と秘藏する事

最上徳内と同道し。終日蝦夷中之事と談ざるよ。古器物の事あと問たきども。多くもなきよしみて。乙名と稱するもの。所藏比古物と望見るふも。別段ふ一人。

上酒の一升も携へて所望し。人ふからきざる様あるおもむきみて。だのまねば。見せざるよし。お聞及し。

谷元且 蝦夷紀行

○犬を使役する事

夷人ハが犬をつのふ。トウタタといひて。道を指教。又も是より彼方へ行時モ。カイタタといひて。綱と少しぬしらふなり。杖の如き物もて。これか連示す事も有よし。休明光記附録

勇拂領字ハツタルセ。星影明りふ来るや。胡女樺明し。持て迎ふ來りしげ。我等を見て其明しを大ふ含

ませ置先へ走り歸りしげ。須臾せ間犬を其明しと含て。我等戎嚮導し程よく行し。二三町過て外の犬一匹來ると夫と噛合。其時火を消たるも可笑事なり。東蝦夷

夷日誌

○子なき時神ふ祈る事

蝦夷子なきものハ神ふ祈モ。子戎もてバ生長の後髪を切らシ。三つ打みして垂置ぬ。名戎神髪カモイオトヒと云。按シテるふ。是太古也容と見ゆ。鷗川の夷ホイシカル神髪なり。此外處々みゆ。斬髪具なき時も亂垂とあるといひ。三つ組ふせしと見ゆ。千島志料

○ 雜混寐の事

松前の方へようみて。第一の漁といふを。鯈數せ子あり。是を捕事。年々一盛つ。初夏より中夏までのうちよりて。十日をうりの間。晝夜をヨのび手毎よ捕る。其時も家臣老職せ者まで。残らば妻子家族を引連海邊よ至る。土人他所人とともよ入交う。男子ハ網サキとたれ。或も捕たるを持運び。婦人も其魚を割數せ子を取分是残ほし。深夜よ及べば。ゆきなりよ打卧。京の田舎サキは大原や小原の里サキは祭禮よ有る。雜混寐といふよひとしく。男女せよのちなく。枕をどうりぐるより。不義不

埒なる事多しといへども。是を厭へば。鮓ととるを妨報らるゝとて。古より志らずがほして。打捨おくづ土風なうといふ。さるふより。常ふ家臣等。土人ふ對し權柄ある事られば。狡黠の奴等も。鮓とう比時。思ひ志らせんと惡口しひるとなん。土人語りける。是哉以て上下の序正しらう。治うかぬる事推てあるべし。同上

○人足の事

奥地より。中蝦夷へ引拂ひの時。場所々々みて荷物を持送りふし。男女比夷都て朝より晩比泊まで持通すなり。一日比行程近きも五里位。遠きハ八九里までも

り。極うたる道といふよもらひ。平場ハ海岸の砂  
深き所ふあらばきバ。山坂谷間は所ゆゑ。五七里ふて  
ホ。本邦十里餘の道中行たる如く。泊所ふ着せば。  
草卧し。夷人を荷物を負て歩行する事。場所ふよう  
三四日を追通せし事。更ふ疲れたる氣色も見  
え。さのみ強きものふも見えざれども。其段ハ日本  
人も勿論。よそき牛馬も及びがくらるべし。右歩行す  
るよ草鞋をもきしものハ稀みて。大概もぞしなり。山  
道雪中などハ。いともしき事ふむへども。夷人ども  
ハ左程ふもなきと見えた。夜ふ入て酒を調へ遣を

せし。ふ。よろこぶ事限りなし。泊所より着せし辻。本邦  
せ人と違ひ。泊所へ荷物をおろすまでみて。足残洗ふ。  
事もあく。其儘休息の小屋に入。土間より火残たき。其周  
りより居並び。賃米より請取し米を粥より焚。是を食し。夫よ  
り遣したる酒残打揃て飲とのよし。老たる者火のか  
よもらふ。卧あづら頭をたぐき。又腹をたぐきて。より  
らぬ事を謡ひ遊び樂む事あり。是をユウカルといふ。  
本邦より淨瑠璃なり。女は子若夷の手をたぐきて。おど  
り遊ぶ事夜を明し。其翌日も荷物を負ふて七八里を  
行あり。一駄心得悠然として。物より動ずる事なし。晝夜

の場所拭ふて餘りたる飯杯を。老人の中ふも。若年比  
ものなどへ遣しても。其あは一人ふても決して喰せ  
ば。縱令少しだうとも。夫々配分して食むるなり。扱女  
比子同士集りて。煙草を吸を見るふ。きせる一本ふて  
三四人つゝも寄集りて坐ふあり。一吹吸ても次へも  
さし。又其通ふして次ふ渡しどり吸ひ。酒など飲む  
其坐ふ居合たる夷人も。少しだうとても受け得ざま  
る事ふて。一躰氣前を愚昧あれども。心ざしハ善所も  
ありて。小兒も同じく善ものどもありぬべき。土産

○擇捉人高田屋金兵衛を慕ふ事

金兵衛ハ去天保四巳年二月御咎上付淡路國へ引取  
しより。船乗并產物方の渡世を止まし。東地荷積  
の義達でたのめる事の有之。無據一昨年。擇捉の内テ  
トメマンヘ荷積として渡海。酋長共ふ四五振小  
て逢々れば殊の外懷しづり。金兵衛事もいつ頃生る  
来る哉と。皆々問々する上付。何故乎斯くも尋るぞと。問  
ひむせば。酋長ども答て曰く。誠も當時も至りても。宛  
行向手ひどく。飯ハ博飯一つよから。仕着寺手薄く稼  
め。賃も。會所北帳面よりゆうてす。仕切々々よろしく  
と。賃錢を不渡。使ひ方むり。嚴敷しぬれば。一統歸服

せざきども。今日此渡世ゆゑ無據勧居れども。右の譯  
故實の勵をねむ氣力ハ無之。何卒して以前の公儀小  
て。金兵衛勤る時比如くいたし度。何故乎金兵衛を御  
咎よて退らされたる事ぞと。公儀を恨み奉るやうの義  
を述。皆々懇々安否を訪ひ乍り。依て金兵衛を答ふる  
辭なく。世比中もねほ又宜敷時節を有るべし。勧を第  
十ふて致まづしと申聞たり。然るふ荷積持運び等の  
様子見受るふ。手當向等も以前ふ異り。金兵衛時代と  
ハ違ひ。手ひどき様子故。蝦夷共の歎も尤なり。嘉兵衛  
時代より金兵衛より。萬般心裁用ひ取計ひたまし

事と見え。蝦夷共迄も。公儀の御威徳を仰ぎ。何卒して  
以前の如く。公儀地を願居る心中と見ゆ。是全く公儀  
の盛なる化澤。自然よ行あるものなるべし。松前の  
諸人及蝦夷共迄。金兵衛を慕ふ。同人在勤初。諸般よ  
冥理を申諭し。召使ふ至るまで。指揮したるよし。聞  
ゆる。即功德の天命より顯る道理乎とぞ察せ  
らる。松前秘說

三月廿〇蝦夷人赤人よ親む事  
寛政七八年の頃。赤人大船一艘六十人内女三人。クル  
ムセの夷一人乗合。東察加より出帆。比由。同年九月得

撫ふ渡來。ワニナウと云港ふ上陸して。家倉を作り居  
住む。初め辰年マツコタンふ住せしが三人死し。已年  
三月廿八日歸國し。午年六月十四人歸國の殘う十七  
人内女三人。

此人數の内も死失歸國のきハ不足

公然として不去。赤人比長たる者二人あり。マイタラ  
シと云者午年歸國也。今モケトフシといふ者殘て在  
留し。赤人比子も出生して。已ふ五六歳ふ及ぶ。其帥る  
夷人モまゝ赤人比風俗ふして髭を剃る。シモシリ比  
夷シレイタといふ者來て。赤人の通辭をなす。鎗砲火

藥夥しく蓄置き。十年餘常ふ用るも今猶蓄あり。赤人  
は内銀冶まるものあり。犬の如き毛白く尾長き獸持  
渡り畜置く。小船二品あり皮もて張り木残骨も入達。  
不用時を木残弛し皮を疊む。大さ圓合船よう小なり。  
夷人をトントナツアといふ。赤人をマイタシといふ。  
一品を木もて造る。夷人をロクントといふ。赤人もホ  
ロシヨンナイと云。赤人來りし初め厚岸は乙名イコ  
トイ。此島より超年し。赤人と殊ふ親しう。イコトイより  
も赤人國王へ臘虎皮を獻す。前も赤人共夷人より對  
して。格別親しみたる事もなく。まことに毎度獵業をあら

そひける事ありし。辰年擇捉夷人等赤人在留後初  
て渡海せる時ふも。赤人格別ふ夷人哉親み丁寧と盡  
し。擇捉夷人例年の如く得撫嶋渡海せし。赤人此家  
ありしゆゑ。不審ふ思ひ。沖合ふ踟蹰せり。然るふ赤人  
夫より日ふ飲食砂糖等と贈り。ウタレふ至る迄。酒食  
と以て饗待せり。其上獵漁之事も。往古常ふ爭論あり  
る。此度も不然。夷人臘虎を持徃き賣らんといへ  
ば。日本ふ出をべき產物なれば不可買。輕物を日本ふ  
出をべしなどいへり。日ふ引網と以て漁事して。其魚  
半を夷人ふ分ち與ふ。赤人云。向後年々日本產物持來

らバ。彼國よりも品々持越し交易モベシ。蝦夷地モハ日本  
本人來り居故。日本產物多かるべし。何品よても持來  
るべし。其内皮類尤望む所なり。また米を格別珍重モヒ  
といふ。夷人モヒ見る毎モハ日本比米を所持せモベシやと再  
三問ふ。米モハ度モハべくば。段物類何よても交易モベシ  
しと云。通航一覽

○浴せざる事

石狩字ウエンベツモハ云所の曠野モハ行モハるよ。露深し  
て満身濡モハきモベシぬ。土人モヒ是をドンブリタ々モハいひ  
てゆく。其意ハ風呂モハ入りしと云る晒落モハなりと。其故

を土への法として。風呂に入る事なし。若運上屋等にて風呂の中と。掃除にてもさせんといらしむるが。病氣みて温泉にても浴せるや。必衣服を着たる儘浴するなり。故より如レ此云しなり。石狩日誌

蝦夷人も湯浴ハ勿論。朝起出ても手水つりふと云事もねし。手拭タオルももくぬ故。海おりもどうても。そのぬきたるまゝみて。いろどりの火アヒトクりほきなり。大小便をしても手もたらそば。草むらの中。濱邊比岩間ヒマツまひりちらし。夜卧ふもふきまわなく。アツシ一枚着アツシる儘みて寐るなり。夜中ハ徃還アラタナハシふ犬比糸アヒテるやうふ。雨

露よりうゝせ。土間よりして居るむなり。まあとより野鄙の極みて。いまと開けば。如此淺間しき体あるも歎可也しき事ならばや。孝弟忠信五常の道をとき。文字と習をせ。耕作の道をもつゝへ教示せしめば。人道よりふやうふへ。多年を経ばとす。むしうつるべきと思ふあり。夷諺俗話

○水豹等臓數を知る事

水豹を屠るよ。肺の臓六つ有。土人の言ふ。水豹も六枚。狐ハ三枚なりと語る。土人ハ如斯事迄よく心附しげ。實より不思議と云べし。知床日誌

○ベウタンケ此事

増毛より濱益へ渡る時。雄冬の下より難風ふ遇。船を  
岸へよせんと思へどか。よほど沖を走る船故。濱邊へ  
寄る事ぬう。甚ざ危ふう。水主人足の夷  
ども。ベウタンケと云げられバ。

ベウタンケといふを。何事よても異變の有る節。聲  
皆立る事なり。甚憂悲なる聲みて。もの凄き事なり。  
こ此時濱邊へ。口カルイシの夷小屋よう。此聲を聞け  
け。夷どもたひく駆出を見請し故。其所へ船をよせ  
んとせしが。波至て高くまで。一舟中へ打込たり。

船は中海水おびてしき故。大びざく亦小桶あどむ  
て。おほと汲出し。大ふ難澁まる其内。所の夷ども大  
勢かけつけ來り。大繩を持て波をくぐり。舟は中へ放  
だし。故。船中みて早速その繩とどり。漸々岸へ船着た  
り。夷諺俗話

○落葉を衣の代用する等の事

雨乞きりふ降。雷もくめきぬれば。夷人ども歎冬の葉  
をもて。蓑衣ふかへて着し。まく其莖をねぢ折て。傘の  
如くさげ行ひ。谷元旦蝦夷紀行

夷人兩人。弓を携矢筒を負て案内也。此日山へ登る時。  
夷人等云々るも。先山の神ふ神酒を備へ。然るべしと  
云々る。是を夷人等神酒と云て。實を後各飲べしとい  
ふ手段なりと。谷元且蝦夷紀行

○蝦夷地饑饉の事

東遊記ふ。天明四年甲辰比饑饉ふ。蝦夷地近き所の民  
家飢ふ及ぶ所ハ。蝦夷ども鹿を捕へ來て養ひ。子あど  
有て育かねたるとも。兎角してもぐくめる事也有と  
いふ。常ハ蝦夷戎獻て逐拂ふやうふせしも。其力ふよ  
里て助のりたるもの多し。誠ふ殊勝の事なり。今年の

春の他國より松前を渡る者。餓死するもの多  
い。瀬棚といへる地方岩山間より土ふかうを  
何とも志きぬ。青きものを湧出せると取て食らへば。餅  
あど食ふやうなるふ。餓を助のりし者多し。又籠の實  
一方石程なりて。大ふ土地のたまけとありき。千鳥  
志料

○蝦夷牧馬の事

松前所在島一圓を牛馬を飼ふ。山野を放し置なり。  
夏より秋も青葉枯草なりて食物を飢む。因て曠野を  
遊ぶ。冬ふ至りて雪降積みば。雪中より秀る薄の穂など。  
喰居といへども極寒、北頃をなまくば。雪も大ふ積り。

薄の穂を積雪ふ埋うて。食物絶ぬまば濱邊ふ出て。遠方より波浪ふ打寄らむたる海藻を拾ひて食ふ。其時を待て馬残取集めて。雪の上ふやらひを結び。其内ふ飼置て。干草とて毎秋刈干て貯置たる。蓬交り比茅を與へるあり。如此麿末比手當なほども。馬の剛強なる事。日本比馬ふ比類なし。轡を用ひず沓ももあせらず。山阪岩石磯邊河原等を厭そむ遣へども。少しもひるむ事なし。中道すづら土人比風俗を見るふ。大古風俗かくもゐるべきのと思ひる。然う。馬士一人よて馬を五疋をあぎ連て牽。徃來見る所見るふ。屈曲の山路ふ

て。人足を防ぐらざる險岨の山坂等々。徃來あるふ難  
しとも見ええど。まゝ夫あり遙よ過て。濱邊よ出て通り  
ける。渚ふ飼馬と見て六七足遊び居ければ。彼馬士  
そば馬を撫まそし。能馬哉見とごめて戾達り。予不審  
ふ思ひ其故と問ふ。時ふ馬士云。某ば馬二十日計以前  
ふ野放しあけるふ。いまざ見ええど。ありて渚端に馬。某  
が馬ふ能似たる故。得と捕へ見まば。某が馬ふらば  
と云。予失しらと問へば。馬士が答ふ。若熊などふとら  
きたる。生てだふ居まば。終ふそいはく尋當るべし  
と云う。蝦夷草紙

○染料の事

天鹽へシケニウブといふ所みて。胡女々種々の色糸  
みて。アツシを織居よりしづ。其染方を聞ふ。赤く染る  
時も。ラルマニと云木みて煮ると。是も則伽羅木。俗稱  
於武古。夷稱伽羅木出於蝦夷及松前。土人呼曰於武古。  
和漢三の木みて。水松廣東新語桺唐韻曰桺音永漢語抄木  
才圖會可爲笏也和名赤檣イナヒ用明記櫟等見也共孰れう是あ  
るをえらば。余を土蘿木ふ當るう。其故を此木家財の  
地副よ用ひ置しづ。石よ化せしよと度々有。土ふ蘿う  
易きより號る。又染物をなほ蘿枋比惡き品なうと

て。土蘿の名有りとモ思ハる。松前みてオシコと云。家々染物とふに用ゐるなり。是をオシコ染と云なり。鼠マウスも沼モネふ浸し置。黄茶イエチャも赤楊シラカバ木皮スギノヒもて煮。紫シシマツも岩イシ梶カシの實ミ藍ルリもシエイキナとて。深山の陰地カモメガタケも生スル。長二尺餘ニメもし。藍の葉ハ如くよて尖り。秋末ハサフも白花シロバと開く。是みて染ると。按アリせらむ是大青タカシマヤシ高二尺ニメ。好ハシマツ陰惡陽カクシマツ。搗汁タケヅケ可染タケヅケ重修興カクシマツなる。新嘗會シナガタツキも縫殿寮ヒナマツシヤより。調進アシテの小忌コモリの衣アヒを染る。山マツあるなるやと思ふなり。往古より松前箱館マツフクラの地ジ。寒氣強ヒヤクく紺屋シロヤなき故シテ。種々の物モノもて染用タケヅケひし。追々ひらけ其染法タケヅケノホトトキも。今も誰知シテる者モノなくありし。

ぐ。此山中ふも未だ残まう。天鹽日誌

○夷女うくれめの事  
ニゴリ川といふ所よ。夷屋七軒のうち鍛冶や一軒のみ。  
又さらみをのしき事あり。此里をあまふフライと  
いふ女あり。年齢ハ二十二三歳。ふも侍るづ。錢百文づ  
ふて。うか連女ふ出るよし。蝦夷北遊女も珍らしき  
らん。袖ふりぬふも他生の縁とやら。嘸のしをうしき  
事どもの侍らん。旅のうきそらしよ。一夜あぐさむべ  
しといへども。誰ぬりてゆむものあし。左もぬりぬ  
ん。きべて蝦夷女ハ。きりやうは好を侍きど。身ふを彼

此アツシを着し。髪毛おどろき亂し。化粧など勿論。湯  
ぬひせし事もあきと見えて。きさふき事いふそりう  
なし。その香なまぐさくして。ねうく百文をさらなう。

無錢みてもゆく人のあきる。ことよりなう。西蝦夷地高島

日誌

○夷女高雄と名のる事

西蝦夷手宮よ。番人の寵愛せし。高雄といへるメノコ  
ぬう。此事かゆて聞しより。みほしくおもふ折の  
うかの女子戻見きば。三味線のやうなる鳴るものと  
口ふくもつてひき居たる氣色。さあぐら秋の紅葉と

モあとよ勝きし粧。誠や都近き名所也。是よりいので  
まさるべしと。なづめぬのぬ事残思ひ侍り。同上

○藩士夷女の手を取て辱めらるゝ事

ゆる藩士。蝦夷地歴覧のため東部へ來り。根室よう西  
別へ渡海せとき。圖合船ふ乗るふ。權をとりくるハ。多  
く夷女みて有る。藩士其夷女ら手首せ入墨を警視  
し。あらもよく見むや。おの迷ひ手もて。夷女比手と  
とらんとせしき。根室の總乙名。仁助といふもの船  
中ふ在しげ。此有様を見ていひ々るやう。いふエシ  
ドコタシ江都の比とのなりとも。女の手残取給ふも。

らうがハしきあと。侍る。そハ無用。おなし給ハ  
なんやといひたりけ。流石。北藩士也。當然の理。ふ  
窘め。らき。赧然として。志うぞ。ると。ねん。東蝦夷  
夜話

○勇を以て感服せしむる事

釧路詰の有司。小田井某といふもの。阿リ。根室と釧路  
北領境を見分のくめ。庄屋精一郎。その外七人を引具  
し。食物卧具を用意して。安政四年正月二十日。釧路の  
役宅を立てる時しも。雪數十尺降積り。殊よ當已年ハ。  
近年少稀なる大雪なり。くる。志うも五日め七日め  
ほど。み降積る雪の。所よりて。凡二丈もや。あらん。

正月より二月ふもとある。常の年まら雪比最中  
よて寒威きびしく堪げ。さき折なるふ。山を積雪比上  
をよぢ。沼川を水を涉り。日暮あんとそれば。その所ふ  
丸小屋を補理志て宿達るふ。上下四邊雪ふ埋もき。夜  
の更るふ志さがひ凜々として。寒氣もよきて甚しく。  
立樹坐ら凍割ワルる音比きこえけり。そが中ふ何ものら  
も。雪踏あらし來くる音のしほ達ば。小田井を大ふ訝  
りぬやしみ。いのあるあとの向ふうと。丸小屋の内  
よう。ひそりよ窺ひ見きば。大やう馬などもやぢらん。  
白き班毛生ひくる狼と。雪比あからに見とめくり。小

田井もはらく思ふやう。今鋸炮もて打捕るも餘りよ  
容易く興少し。今よひは空しく追走りぞけ。翌日の夜  
來らば生捕らんものなりと。獨うあげき聲シハグキ欸エキしあが  
ら。側なる薪を取て燃したつまば。焰の光りよおそれ  
なん。いづちともなくゆき。影ざみ見えばなりと。と  
わうゆるやどもなく夜の明ぬきば。雪頗りよふう風  
さへ強々走ば。此日もあゝよ逗留と定めつ。精一郎  
その外夷人等よいへるやう。今日もまさかの雪よて  
ハ打立がよし。ざいにほど小屋のうちよ夜をがら終  
日蹲クマり居て。おせ業あきも徒然なり。僥倖あるうあ。今

よひも果して。よべのカムイは來うあん。其時こそ生  
捕ふして牽もて歸らめ。そのなをやうも。雪中へ寢を  
堀て陷いれ翼ワタもてとらば易うてなんといへバ。精一  
郎をそじめ衆夷等を聳然として言葉なく。やくらう  
ていひ々るを。そもけしからぬおほせりあ。決て無用  
ふし給へぬし。か迷ひ他の獸とちがひ。神變不思議の  
猛獸ふして。まさよく群を集むるものなり。今あまじ  
いふおと残なし給ひなば。ニシハ且那といふ残そじ  
め。チヨヲカイウタレ私共とい。一同生ての歸らるま  
じ。おの地みていかき残さして。オホセカムイとて。獸

ながらも神と尊稱す。そもそもニシハ神ふしららば。  
かのカムイをもそ捕へもせめ。かあらば手出しな爲  
し給ひそと請ひくげもひせららざ達バ。其時小田井  
を憤然として聲をそげまし。衆夷ふ對ひていひ々る  
やう。腑甲斐あきえみし等よ。人そ萬物の靈とおそい  
へ。汝等とても五体具足人ならばや。丈夫の魂を左より  
らば。仮令か達めが幾千萬の群をあもとも。何のか  
そるもあとらん。弓鎌炮もあらふなり。矢だ孫玉  
薬の盡くるときも。兩刀ともて殲ふせんとて。衆夷の  
言葉ふさりぬれば。獨丸小屋を立出。凡五六歩とへざ

て。穿と堀う仕掛けたり。されば。日向そや西ふ  
入ころなり。小田井も今よひと手ぐせねひき丸。小屋  
の内ふひそみ居て。夜の更るをぞまちさりんる。かの  
狼もはやして。よべのあらまく來うて。そあら哉うか  
づふやう坐と衆夷ハおそれて目と目を見合せ。例の  
イナヲと削ぎて立あらべ。頻々カムイを拜むるのみ。  
小田井もあくぞよき圖と。銃炮の火蓋ときり。空炮一  
聲鳴り響くせば。狼ハ不意とうたきて。ふと足みぬし  
飛去さう逃げんと見る。躊躇との雪のざらく音の  
みして。頬ほ落ちる程こそ。向雪と均く狼ハ穿の底へ

ぞ轉び落ぬる。小田井も得ゝと。丸小屋より聲ふり  
立て躍りいて。穿の側よふみ跨がり。狼の飛ぬぐらん  
となし所と。鍼炮をあてほげさまふ撃たりしげ。腕  
ふあがえの小田井ふうと。あふうはもつて堪らふ  
べき。馬ふひとしき狼也。勢弱うて倒されば。衆夷ふ  
命じて引ぬげさせ。丸小屋の側へひきもて來まう。お  
せとき衆夷の中ふ。豪傑とよばれてる精一郎も。小田  
井の手際ふ驚きあそれ。蝦夷坤輿以來オキ、リマイ  
判官義經を。蝦夷地みて。オキノルミといへども。釧  
路みてハかくいへり。

此外ふも、ニシバヅときの英勇を。見も聞もおよばず。  
おきまでシヤモ地の士達づふ。あらヨリの山へ  
も來うじ。深山をだよいとひ給ひて。蝦夷地にてオホ  
セカムイと尊む猛獸ある。やちくと生捕り給ふも。  
オキハリマイセ。再來みてやかそせらんといへば。小  
田井そ不笑ふ。あぐらいあさみてもなし。爾等よく  
きけよ。此地より遙ふ千里越へざてたる。エンドカム  
イのおもしまい都といふも。爾等見聞も得ゲトト達  
ども。おはまごときの力量ハ。小兒の群よかぞへられ。  
一個の壯士といひがよし。おのきあとより匹夫の勇

を好みて。危哉志らざるふをあらねども。畢竟えみし等也。事物の理ふくらく。獸のあと哉カムイとあして。恐怖のこゝろ哉。をしへ諭さんと欲せるのみといひ。迷々れば。精一郎をそじめ衆夷等も。ともふさとうて合掌禮拜し。且小田井が勇威ふぞ服しける。後小田井語うていふ。總じてえみしを教化せんふも。愛憐をもて専らとハそれども。勇もて示すときハ。却て服從の速あるものなりと。東蝦夷夜話

○蝦夷人を使役する事

唐太番人いふ。附添北土人を日數を重ね。遠方迄行あ

とあ迷バ。其勞を厭ひ折節肩を休め。或ハ勞し或モ逸し。氣分を引立て働くかせゆくム。增人足を所々みて取り。始終、惰氣を生ぜざる様みせざれば。遠路を行事ねうべ。一度惰情を發せバ。病ふ托して働くうべ。一人如斯せば數人其氣合ふかゝリ。甚ざ困る事ある故よ。如此心得均るべしと。觀國錄

○蝦夷人ふ平伏せしむる事

松平信濃守。廣尾場所を通りし時。蝦夷ども手を合せ拜するも嫌ありとて。皆平伏をさせたり。是ふよつて蝦夷共云ふるも。是まで拜したると止め。平伏する程

蝦夷共云々を是まて舟。たまは止の手作

の事ハ。いのやうふをきばとて。蝦夷比難澁ふなる事  
ふむな々きども。蝦夷の風俗を嫌なる御役人の來し  
よてモ。此末何程ウ嫌ひの事ニルべし。徃々も難澁も  
アラムト。酋長クシユバク并トマシヲ。其次の酋長シ  
ヤンケモツチ并シヤルシヤ等。一統歎きて語々る。尤  
なる事あれバ。安心の爲よ云含めんと思ひて。一休蝦  
夷風俗を嫌ひの御人あらバ。此邊上へ好みて旅行を  
る道理ハアラモ。按するふ通辭俄ふ老少大勢の者へ。  
一言よて聞ゆるため。嫌ひありといひし事ならん。公  
儀や民の歎き我押てなせる事アシ。亦致方有ベシと

云含て。兎角難有と云ふの稀あり。

岸上常矩厚  
亂申上

○井を堀る事

國後嶋にて。鹽水を汲て飲食ふ用ふる。其質ぬしく。病を發する。おせ少くらば。當所は在住重松熊五郎といふもの。井水を撰ぶ事妙を得たれば。其地を見極め。井を堀をべし。六月中。正養此島へ着。此時。申置たりし故。則熊五郎所々を撰て。會所の邊にて其所を見極め。井を堀らせ。其水至て清冷ふして盡る期。正養が歸るまで。井桁そぞ外全く成就しきり。夷人ども井といふか。を見て。水なき所ふ水を

求むる。日本人の智測うのとて。驚歎せしもいと  
をかしのうき。是よりして此嶋ふ住むの始て水毒と  
免ぐる。事を得く。是熊五郎の功なきば。則此井を  
重松比井とあづけ。永く此島の名蹟ふせよと。休明光記

○蝦夷地へ穀種を渡さる事  
江差及箱館近在も。悉く畠となり。土産ふ。大豆小豆  
粟稗蕎麥角大豆菘蘿蔔荏種。其外何ふても相應ふ產  
せり。當時ふても稻種を蒔ざるのみ。僕俊明庵の御時。  
奥蝦夷地ふ通路し厚岸ふ到る。此所の運上小屋ふて。  
朝夕の遣ひ水ふ。山の麓ふ少し涌出る清水を汲み運

ふなり。予行て見るふ湧出る泉の邊も。谷地ふて自然  
と生くる稗の稔りたる所。是則粟稗の産する証據  
あり。然るふ彼國法みて。蝦夷地へ。すべての穀物の  
種を渡す事停止ねうと。是嘆すべきの甚ふ所らぞや。  
窃ふ考ふるふ。蝦夷の土人農業手力を盡してハ。漁獵  
の生産を減ずる道理なきば。漁場請負人どもの交易  
品不足し。運上金も減せんとの故あるべし。冀も土人  
ふ粟稗を始め百穀を作らせ。農業の利益をあらしめ  
ば。終ふハ良民となり。上國となるべきハ必然ならん。  
因て當今の風を化して。人道ふ染ましむるの。計策亦

因で當今の風を化して人道を潔ましむるの言第

あるべきなきば。後は君子之を思へ。蝦夷草紙

○ 疾病の事

疾病も。夏夷の差別ありて。日本人の眼より見きバ。異なる事數多あり。先蝦夷入ハ。日本の風俗よ化し。染ざるやうふと。松前領主より令せしむる所なきバ。永久よ化し染まじ。仮ふも蝦夷土人。日本言葉をつうへバ。通詞是を責て。令ふ背ぐる科のびきびときむくいとして。過料を出させ。罪をなげなしむるなり。蓑笠と着用し。草鞋脚絆をはけバ。是又前の如く。やべて日本風俗よ化し染ざるやうふと見る。松前領主の徳あ

う。依之跣足素脚ふて。岩角樹木根籜原の厭ふく徃來  
し。雨降キバ天窓よりぬキ。我家ふ歸リても沐浴ハせ  
バ。獸類の如き境界あり。お達皆令のあらしむ所な  
り。元來日本人と種類等き人ふ達バ。疾病も又等しき  
筈なり。おの故ふ疱瘡或ハ疫病流行を起バ。傳へ移る  
ひと異なるハなし。因て家宅を捨て。深山幽谷ふ逃行  
住居し。其流行病絶て後ふ歸り古郷ふ住あり。親子夫  
婦の中も。看病介抱もせきども。其他ハ皆見離し見殺  
ふして逃去るなり。是みふ醫藥もあき故なり。實ふ堪  
が。こき事どもよて。かく淺ましき國政ふ逢ふ人間も

有すけ哉と。吾身ふ引別して顧きバ。日本の御代の有  
がたきを忘れ難き事なり。蝦夷草紙

蝦夷地ト痘瘡のモヤる時ハ。夷人ども皆深山ト逃隠  
る故ニ。其年ハ產物の出方も少し。夷人ども常ニ穀類  
を食せばして。多く肉食のみあ違バ。痘瘡アビタミヅ  
ラヘバ。忽ニ死せるもの多き。故なり。北海隨筆

○蝦夷地ヘ鼠群集の事

辰年六月より九月まで。松前及び蝦夷地のあらび。鼠  
縣敷集りようし事ゆ。其年留萌トテ。鮭を積込んだる  
穴藏ヘ。鼠おびたくしく這入居るゆゑ。其所の支配村

上長三郎アキラサムラ。大樽四つ。水をそらうて入置。翌朝。あれ  
をみる。四樽ヨリ。鼠ねずみ。一そい。ふ陥て死し居たり。その  
數如何程と云事をあらびとねり。且蝦夷の小兒を養  
ふ。少さき板いた。四隅よのづか。繩いと。を付。屋根やね。うら。ふ釣つるし置。夫  
へ小兒をいれ。啼出うなり。時とき。是をゆきぶう。まゝ。乳をの  
ませなどして置事あり。留崩るぼ。おて右う。如く。ふせし儘。  
その親終ふ寐ね入りたりし。その小兒へ鼠ねずみからりて遂  
ふ喰殺くばくせし。また長病ながびを煩ひ居たる。も其の足を鼠  
喰くばくせども。大病の事故。聲立こゑだてる事。も能のみざれば。是も  
終ふ鼠ねずみ。喰殺くばくされ。家ハ勿論。野の。山やま。よ。如此

終よ鼠も喰殺され。家々外詠里。この事  
數萬の鼠をびありしが。次第ふ減て。四五ヶ月廿内ふ。  
残らば絶しと。此鼠海をモソリ來。まゝ海を渡りて行  
しよしなり。夷諺俗語

○文字及暦法なき事

蝦夷が嶋ふハ。文字も暦法もなれバ。おのぎ生誕さ  
る年月も。父母の没したる忌日もあらば。古く歴代を  
辨するふも。相互ふ年齢を以て引別ちゆるのみ。正ふ  
何ケ年以前何月といふもとハ更ふなき事なり。例バ  
此翁の幼なるときふ。此事ぬうしと云のふ。ねう。又年  
中四季の寒暖をかねて伺ひ志るふも。魚虫等の出没。

或ハ草木の枯槁繁茂。或る鳥獸の徃來を見て志う。潮聲を聞て察し。何日ふして其節季至ると正ふ志る事能むば。暦ね々れば。何ふ因てあるべきやうのらんや。

蝦夷草紙

津輕外ケ濱と。松前。瀬戸ハ。冬中ハ。風烈しく。渡海中絶する事毎度よ。新春よなりて。新暦の渡らざる事。是。由て松前民間よハ。容易ふ新暦の得がたきより起りて。舊年の十二月小の年よ。他國ハ翌年也。元日なれども。松前ハ舊年の大晦日なり。是を彼地よ名けて私大と云ふ。然れば天明六丙午年正月。予松

前を發足して。蝦夷地ふ趣きし。三ツ谷と云處ふ至  
れバ。松前の町人阿部屋傳吉と云者居たりしが。問曰。  
當年元旦せ晝頃。俄ふ天曇り闇の如くふなりたり。因  
て蝦夷の土人共大きふ騒ぎ。いのなる天災ふようて  
ウ。斯く云うしと云ふ。其詞の内より。略暦一枚與へた  
うしのバ。元旦ふ日蝕ある事を知りて。大ふ悦びたり。  
是ふ由て近村をはじめ。真蝦夷地の土人どもふ。元日  
日蝕なる事示して。疑惑を晴しけり。思ふふ此等ハ開  
國より。第一の欠くる所なきバ。早くも補ひたき事な  
モ。蝦夷草紙

## ○廁の有無及大小便の事

夷中なべて。大小比便をなせ。外見と恥辱と也。男子  
ハ小便をる。稀子ハ恥ざるもの。けれど。大便ふ至て  
甚ざ慎めり。女子まゝ殊ふ甚し。人ぬりてもし見るも  
の阿キバ。夷女の法として。償と云事をなは。故ふ夷中  
謹て其法を犯し破らば。松前志

男女大小便所を異ふ。男子ハ凡三尺比高棚を設け。  
女子ハ一尺許比穴を堀。板二枚を並べ置く。男子誤て  
女子比便所へ入まば。チヤランケと唱へ。大子男子へ  
恥辱と與ふ。尤右比位置ハ。家屋より十間許隔て設く。

るなり。蝦夷雜書

蝦夷人ハ男女共ニ。二便を何方へねり。人ニ知しむ  
る事なきものふて。廁シテてもなく。風雨の時といへど  
も。戸外シテみ出て二便シテぬ。他人ハ知らざるなり。止百  
里シテ也俗也。粗似シテるニヤ。葛摸止葛杜の夷俗ハ。不潔ニ  
て。自己の小便シテたくシテて。浴シテといへり。有北紀聞

○雪燒の事

文化元甲子年正月七種を過て。紗那シナを出て。夷人シマヒトども。  
得撫島シマツシマへ渡り口。アトイヤと云所まで出張シマツシマツ。此時雪  
中といひ。殊々極寒の砌シマツシマツ。雪燒と云事あり。耳并シマツシマツ

陰囊をよく手當して。焼ざる様いゝをなり。たとへ手  
足を焼ても苦からず。陰囊耳をやけば。命ふ拘ると乙  
名夷教ていふ。是ふ由て真綿。或そ狐の尾をもつてよ  
く包み。頭を頭巾二重ふして。眼そりりを出し旅行す。  
中略此日纔一里程ふして夜ふ入。右せ手ふ杖を突き。左  
を袖ふ入歩行し。頓てトウロふ着。夷家ふ止宿す。入口  
ふて杖を置んとせしふ。指ひらうざるゆゑふ。左ふて  
取ふ内ふ入。其儘焚火ふて暖ま。夫より旅裝を解と  
せしふ。右せ指一向ふ用立す。居合せし番人夷人ふ其  
由を問へば。雪燒ぬりといふ。藥をなしやと問へば。さ

し當り熊膽を塗るよしと云。ゆゑより持合せし熊膽を塗置しよ。少々腫も見えたまども痛もなし三十日程過て指代皮ときて元代如く愈たり。松田氏四  
六筆記

○飼犬窓より落人の事

トウロと云所より止宿せしよ。朝飯膳居る時。窓より犬一足膳の上より落たり。側より居合たる番人夷人も仰天し見きバ。此家の飼犬なり。夷家を軒比高さ六尺餘にして、堀建草葺屋根より三尺四方ほどの窓あり。入口へも圍ひにて茅を以て簷より是を建通し。道を細く雪を堀明てあり。雪降積り夷家を埋めて。平地の如く

ふなし。夫故外を大荒大風ふても。内ふ居れバ風有を  
もあらず。焼火をくり暖ふして凌ぎよし。此故ふ犬を  
常比如何。平地を狂ひ遊びて思もず。窓より落しなり。

松田氏四六筆記

○小人穴居せし事

擇捉村落北内。小人住居せし土穴くり。其口三四尺許  
ふして。奥を二三間位くりて。本邦金山の舗ふ似たり。  
夷人も是と小人住居せる穴といへり。いふしへ夷人  
は住居せざる前ふも。小人皆鳴ふ住居せりと。年數を  
経し事ふをねきと夷人語述り。八九年以前國後の

夷人。此擇捉嶋より渡りしより。彼の小人漸々より離散せりといふ。紗那藥取邊よりものほど。シヤウツケヤより多く窟穴あり。數十年を経たることありば。穴崩欠て全備せるも稀なりといふ。

惟邦考曰。小人比國を新增刀といひて。クルウシヨシトサ近國なり。ばの國氷海にして。擇捉を距ること數千里なり。擇捉セニフラス共ふ。大底氣候相似たり。セニフラス擇捉ようも。又氷海なり。如斯比數千里隔たる國より。擇捉へ來て住居し。本國の新增刀へ皈といふも不審イダカシきことなり。又曰。新增刀と

云なれば。彼西洋諸厄利亞紅毛みて。ノウハといふ  
も。新しく見出たると云鑾あり。然も新たに見出た  
る小人國なりと云べし。

尖山増刀近所也。悉く永海にして。西洋の人も近年  
迄も。行たるあとなしといふ。諸書も出たる通り  
なり。擇捉み往古より小人。八九年以前まで住居  
せしよ。其頃より所在嶋の内より。擇捉へ夷人渡り  
て。住居あせしゆゑ。小人離散して。永海の内無住  
の嶋を。見出て引越せしも計りがたし。彼是いふ  
しき事どもなり。尚識者の考を待へし。熱多羅  
拂談

しき事ともなり尚譜者の考を待一  
拂談

○オキナ魚の事

利尻サルゝの間。平日海水渦まき。お達モオナキトイ  
ふ大魚。蝦夷人モお達モアトイユウカムイト云。アト  
イモ海。ユウモ持カムイモ神モテ。海持神トイフ言ナ  
リ。大さ凡二三里モアリ。此大魚なるよし。天氣快晴の  
時。かならず浮出といふ。背黒くして小山比如くな  
り。是故アトイシカスマカムイトモ云。是モ海を圍て  
住神ナリトイフ言ナリ。オキナトイフ言也。林子平ウ  
三國通覽モモ出たり。夷諺俗語

○カチコルイベ魚の事

カチコルイベといふ魚也。頭ハ鰓ふ似て。背より腹  
へ通うたる穴あり。尻ふ角せむとくなるもの有と云  
う。東蝦夷地巡覽せし官士の物がさうふ。東蝦夷地ふ  
て。夷人漁ふ出するもの。網ふ。此魚の死するがから  
うし故。是を手ふても。づし流し遣うべる。其手次第  
ふ痛強くなりて。遂ふその片手もげたりしと。此魚海  
中みて角を出せば。夷ども其所を早々逃退となれ。若  
その氣ふ何なりぬれば煩ふと。考ふるふ一角といふ  
ものふや有べき。夷諺俗話

○カムイシマ魚の事

○カムイシマ魚の事

西蝦夷地サンナイといふ所カムイシマと云石有  
り。此石黒き石みて蛇の横へそりたる如き摸様白く  
なり。若此石を誤てふむ時も病死坐とて夷共大ふ恐  
る事なり。夷諺俗話

事持。夷節卻轉

也。喜故名號。本建都。歷五王。大。夷莫大。小。也。却。是。則。有。子。也。波。之。難。少。也。子。吹。也。難。難。白。之。

蝦夷風俗彙纂後編卷七

終

蝶夷風俗彙纂後編卷七

七言詩

